

卒業する子どもたちの姿から想うこと

田代 和美

今年の三月は、珍しいことに幼稚園、小学校そして中学校を巣立つ子どもたちの姿に出会うことが出来た。幼稚園では二年ないしは三年前に入園した頃の子どもたちの姿や園生活の中で出会った様々な姿や表情を思い浮かべるにつけ、一人ひとりの子どもたちの成長を目の当たりにして驚きに近い感慨を覚えた。この一年間は訪れることができなかった園

だったのだが、成長というのは基点があって初めて感じられるものなのだということも改めて実感した。それと共に式次第に入っている敬礼とは対照的に、「おおきくなったら、パン屋さんになりたいです」「おおきくなったら、サッカーせんしゅになりたいです」。そうやって一人ひとりが語る言葉を聞きながら、自分の好きなものや自分の好きなことが

「大きくなったら……」の後に続けられることの幸せを感じた。でも改めて考えてみると「大きくなったら」という言葉は、子どもたちの中で一体どのような意味を持っているのだろうか。今の自分と繋がっているのだろうか。それとも別の存在に変身するイメージなのだろうか。それで思い出したが、自分の子どもが小さかった頃、保育園での七夕飾りの短冊に書く子どものお願いを、毎年代筆していた。

確か二、三歳の頃、「大きくなったらパンダになりたい。大きくなったらキリンにもなりたい。」と書いた憶えがある。その当時は動物が大好きだからと思っていたが、今想えば、子どもはおそらく「大きい」ものを想像したのだろうと思う。そう言えば、二番目の子どもが小さかった時、年の離れた姉と必死に渡り合っていたのだが、よく「わたし、大きかった時に○○ちゃんと映画に行ったんだー」なんて言っていた事も思い出される。星に込める願いが

大きくなったら何になりたいかという願いに置き換わることは、園の習わしなのか子どもの特性なのかは定かではないが、その後、先の子どもの短冊の願いはセーラーMoonになりたい、ラーメン屋さんになりたいという言葉に変容していった。非現実的な夢から現実的な夢になっていくと言ってしまうまでもだが、行ったり来たり出来る多層的な時間とは別に、過去・現在・未来というリニアな時間の流れがあることを感じ取ることと幼児期という時代は終わりを告げるのかもしれない。そしてまた、大きくなったら……に続く好きなものやあこがれがあることは、子どもたちが日々大きくなり続けていることと切り離せないものだとも思う。

時を同じくして、小学校を巣立つ子どもたちが同じように「将来の夢は……」と語る場面に偶然出会う機会があった。「将来の夢は、サッカー選手になることです」や「日本一のバスケットプレイヤーに

なりたいです」や「将来の夢はコックさんになることです」「将来の夢は優しい看護師さんになることです」というように自分の身体を使って、直接手応えを感じられるものや、人に喜んでもらえるような夢が多かった。学校の先生になりたいという子どもが一人もいなかったことはどう考えていいのか……

とも思ったが、でも大人の身勝手さなのだろうが、幼稚園を卒園する子どもたちと、どこか似ている幸せ感をともなう夢を小学生はまだ持てていることに、少し安堵してしまった。それと共にこう言えるのはあとのくらいなのだろうと、その後の大きな変動をよけいなお世話ではあるが案じてしまった。

一方で将来の夢には、その時代の動き、メディアで取り上げるものや身近な大人の価値観などが否応なく染みこんでいることも改めて感じた。子どもだって社会の中で生きているのだから当然といえば当然なのだが、時代や社会というものは、幼稚園を卒園

する子どもたちにとっての「大きくなったら」と同じように、小学生にとって見えないものだ。だから、それを知らず知らず取り込みながらも身近な手応え感覚を大切にしているのだろう。

そんな将来の夢を語っていた小学生だった子どもたちは、中学校の三年間を終える頃には、将来の夢から進路という形での現実的な壁に向き合わされる時間を経る。おそらく小学校を卒業する時に語ったであろう将来の夢は、高校受験の際の志望理由書には書くのが憚られるようになっていくことが多いだろう。私が経験した時代とは大きく変わり、また刻々と変わり続けている制度や多様な選択肢の中で、子どもたちはそれぞれが迷い、考え、そして新しい場に歩を進めていくことになる。大人から見れば狭いと思われるクラスや部活動の世界のなかで、お互いに深くかわるることにより異質な考えに出会い、思いっきりぶつかり合い、泣いたり笑ったり大

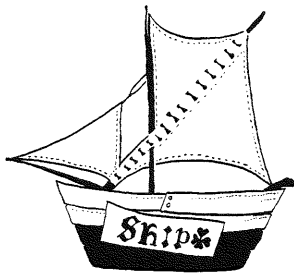
忙しの中学校三年間を終えた子どもたちは、卒業に際して号泣していた。世界が狭いなんていうのは、

大人が勝手に言うことで、たとえ物理的には狭い世界の中でも、そこで深くかわるることによって、そこから広がりのある心を持てるのだとこの三年間を通して改めて子どもたちから教えられた。差異はどこにでもあるし、差異とみなすか否かはそれぞれが判断することである。そして差異を認めた場合に、どうやってそれを乗り越えて一緒に活動していくかは、中学校という世界だけでなくどのような世界においても通じる貴重な経験であつたと思う。

一つの場での生活を終えて、それぞれの子どものちの新しい場での生活が始まる。「大きくなったら……」と言える幼稚園・保育園を終える子どもたちが、ほぼ身体は大きくなってしまった中学校時代を終えるまでの間、そしてそれに続く時間も含めて、大人のかかわり方はそれぞれの時代で異なるが、子

どもたちが夢を描く将来について、その責任の一端を担い続けていることに違いはない。

こう書いている途中で、イラクで日本人が拘束され、彼らの命がイラクからの自衛隊の撤退と引き替えになつているというニュースが入ってきた。テレビでは、人の命は地球より重いという言葉とテロとの戦いにおける世界の中の日本の貢献という言葉がぶつかり合っている。一体誰が何を守ろうとしているのか。日々のニュースを見て様々な質問をしてくる子どもたちに大人として何を語れるのか。自分の考えを伝えることは出来る。でも、それと真つ向から対立する考え方を頭ごなしに否定するだけでいいのだからかと迷うことがこのところずっと続いてい



る。子どもたちの日常生活の場でも常に相対する考え方が拮抗している。大局的立場から子どもを見る立場と一人ひとりの子どもという立場で子どもを見る立場と、保育現場での日々の子どもの生活と、国の進める政策と。位相の異なる立場の考え方が一つの場に混在して、ごちゃ混ぜになっている。

それらの間に相互のすりあわせが出来ないままに日々が流れいくもやや感を抱えながら、でも子どもたちとの日々が少しでも楽しくなるように希望は捨てずにいたいと思う。時代や政策という大きな相手は、自分自身の言動とももちろん無関係ではなく、そして子どもたちにはじわじわと染みてきたり、急激な変化を強いる。自分としては、子どもたちとの生活の場で、毎日の積み重ねを大切にしていきたいし、一人の人間が出来ることは多くないのだからと立ち位置を動かさないでいたいと思いつつも、でも大きな流れに対して無関心を決め込んでしまうの

は、どこか子どもに対して後ろめたく、大人としての責任を果たしていないようにも思う。二項対立の図式を設定して話を通じない相手方として済ませてしまうのではなく、子どもたちが育つ場の中に入り込んでくる自分の考えとは異なる立場の考えとどのようにかかわっていけるのかをこれからはもう少し考えていきたい。

今月号を以て九年間に亘る本誌の編集から私は卒業する。これからの新しい生活の中では、この九年間が違う形で私の中で生き続けていくことと思う。本誌をこれまで読んでくださってきた方々、書いてくださった方々、ご協力頂いた多くの方々に心より感謝申し上げます。

(大妻女子大学)